

質的研究と SCAT について

大谷 尚

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 特任教授／名古屋大学 名誉教授

1 はじめに

筆者は質的研究者であり質的研究方法論研究者である。自身が質的研究を継続しながら(大谷,2006など)質的研究方法論の研究を行い、質的研究ハンドブックの編纂(大谷・伊藤,2006)や質的研究の解説(大谷,2008b,2013,2016a,2016b,2017など)を行ってきた。また2007年に質的データ分析手法「SCAT」を開発し、その利用の支援のために質的研究とSCATのセミナー・ワークショップを、そして質的研究そのものをデザインするワークショップを本稿提出時点までに170回実施している。

この度、本誌からSCATについても触れた質的研究の解説を書くようにとのご依頼を受けた。そこで本稿では、本誌の読者が理解を有する量的研究と対比させながら、質的研究を解説することに努めたい。その際、社会調査における「事例研究・質的調査」と質的研究との違いについての筆者の考えも述べようと思う。

2 質的研究とは何か

1 量的研究と質的研究のデータ採取とデータ分析

量的研究は研究対象を測定して量的なデータを採取し、それを記述統計や推測統計あるいは多変量解析などの手法で分析して結論を得る研究であると考えられる。それが社会調査であれば、その対象は社会やその構成員として

の人の行動や考えなどであろうから、観察や面接、また質問紙(調査票)などによって量的なデータを採取する。また国政調査などで収集されたデータを詳細に分析するということもなされるだろう。さらに近年では、インターネットを用いたデータ採取も行われている。

それに対し質的研究では、量的な測定や分析は行わず、観察や面接によって、主に言語データとしての質的データを採取し、それを固有の方法で分析する。量的研究に対する質的研究の意義はさまざまに語られているが、ここでは小田(2002)による次のものを紹介する。「まず質的研究は**現場に近い研究**を可能にする。**生きる側に近い研究**への道をも開く。(中略)数量的な測定からこぼれ落ちてしまうものこそが、実は現場や人生においては重要かもしれないのだ。人間にかかわる学問分野が数量化・標準化の規範にとらわれたままでは、有効な学問的知見の多くを逃し続けることとなる」(太字は原書通り)。

2 質的データの数量化、そこで生じた問題、その克服

ところでどんなものでも量的に測定し処理することは不可能でない。たとえば統計数理研究所所長だった林知己夫が1940年代から50年代にかけて開発した「林の数量化」と呼ばれる手法は、質的(カテゴリーカル)なデータを量的に扱うための体系的な多次元データ分析法であり、日本の国民性研究などで大きな業績を残した。しかし他ならぬその林自身(林、



1976) が、数量化によって、得るものと同時に失うものがあることを、次のように述べている(下線は引用者)。

しかし、そこには複雑な人間の心や機能の姿が消えて、抽象化された機能のみが取扱われることになっていないか。枠にはめられた人間研究が盛んになり、大事な人間の心理学研究の原点が忘れ去られることになってはいないか。社会心理学の方も、調査という形でバラバラにされた人間の反応が多くとりあげられ、多くの様々な人間の集まりによって形成され動き変容してゆく集団的・個人的心理としての——人間の関連のダイナミクスから生ずるいわゆる群集心理のようなもの——社会心理が厳密な科学的取扱い、計量化の難しさのため科学的研究の網の目をぬけているのではないかという様に思う。(中略)これを要するに、数量化に耽溺しダイナミックな関連性をもって生きている人間らしさを追求することが稀薄になり、極言すれば数量的、数理的あるいは形式的明晰性——精密科学の様相——に憧憬をもつに到った様に思われ、この行きすぎは、データとデータの対応を志向する私の様なデータ屋の基礎知識としても不満足なものとなってきている。何度も繰返す様に、数理的・計量的実証性によって科学性を似て明らかにし得たものも実に多いが、一方これによって失ったものも実に多いことと思う。

林の言う「失ったもの」を取り戻す役目を負うのが、質的研究なのだとは筆者は考えている。しかしそのためには、単に質的に研究すれば良いわけではない。数量化理論の普及によって失ったものを回復するためには、数量化理論と競えるような科学性を有した質的研究を確立することが求められているのだと、筆者は考える。

3 量的研究と質的研究のパラダイム

ただし量的研究と質的研究の違いは、データ採取とその処理が量的か質的かだけではない。両者を決定的に分けるのは、それが依拠する存在論と認識論、つまり「パラダイム」である。

たとえばインタビューについて「話し手は話すべき体験を事実として客観的に持っており、聴き手は中立的な立場でそれを引き出すべきだし引き出すことができる」という考えがある。この考え方は、話し手の中に話すべき体験が確固として在ると考える点で、研究的な存在論は「客観主義的实在論 objectivist realism」であり、それを取り出して、得べき知見の証拠とすることができる点で、研究的な認識論は「実証主義 positivism」だと言える。量的研究のすべてはこの立場に立っていると言ってよい。したがって量的研究者の多くは、パラダイムという概念を持っていない。量的研究者にとっては実証主義こそが普遍的に正しく、それ以外の存在論や認識論はあり得ないし、仮にあったとしたら、そのようなものを研究に持ち込んではいないと考える。

それに対し次のように考えることもできる。「人々は個々の体験を事実として持っているのではないし、そもそもあらゆる体験は主体とは無関係に事実として存在するのではなく、社会の中で人と人との相互の関わりにおいて、その人たちの事実になるのだし、体験中や体験後に、それについて思ったり考えたり人にたずねられて人に話したりするときに、その人にとっての事実になる。そしてその作業はつねに社会的な文脈、条件、制約に基づいている(『事実は社会的に構成される』)。だからその事実はつねに固定したものではない。インタビューもそのような過程であり、体験について言語化するのは、聴き手にたずねられてそれに答える時である。その時、話し手は、その聴き手がどういう人物かによって話す内容を意図的あるいは無意図的に変える。またむしろ、

聴き手がどういう人物なのかを探りながら話す。このようにして話された内容は、聴き手と話し手とで作り出した相互行為論的な状況の上に成立する『共同構築的テキスト』に他ならない。これは、先の考え方とは異なり、ものごとが客観的に実在しているという考え方ではない。この場合の研究的存在論は「社会的構成主義 social constructivism」や「相互行為論 interactionism」である。そして、このような立場では、「意味は解釈によって与えられる」と考えるので、研究的な認識論は「解釈学 interpretivism」である。

ただし量的研究のパラダイムが実証主義しかないのに対して、質的研究のパラダイムはさらに多様に存在する。それは実証主義に近いものから非常に解釈主義的なものまでである。より実証主義的であるほど研究参加者数は多くなり研究者は「事実」の解明に努める。いっぽう、より解釈主義的であるほど研究参加者数は少なくなってn=1の研究もいくらかでも存在するし(安藤,2014;山元,2019など)、実証主義的な研究ではあり得ない、自分自身を対象とした研究さえも行われる(近藤,2016;神原,2016など)。そこでは「事実」より「意味」の解明が求められる(Otani,2020)。

4 社会調査における「事例研究・質的調査」は質的研究と言えるか

社会調査における「事例研究」にも、観察や面接によって非数量的なデータを採取しそれを分析する「質的調査」があるが、それはそのプロセスに「秘儀性」とさえ言われる「ブラックボックス」を含むとして、一貫して量的研究者から批判されてきた(岸,2015)。それに対して岸(2015)は、本誌掲載論文で、そのようなブラックボックスがじつは量的調査にもあることを、実際の量的調査の経験を詳細に記すことで(質的にだが)見事に明らかにしており大変興味深い。ところがそれを根拠に、だからど

ちらも「おおまかな正しさ」に向けて努力できるという結論を導いていて議論が煮え切らない。

そもそも岸はこの論考の一部で「新しい質的調査の方法」として、せっかく桜井(2002)の「対話的構築主義アプローチ」を紹介しながら、その紹介に留まるだけで、パラダイムという概念で量的調査と質的調査を対比させてはいない。筆者に言わせれば「対話的構築主義」は単なる「アプローチ」ではなく、むしろ「パラダイム」である。それにもかかわらずこのような論述に終始せざるを得ないのは、社会学が多様なパラダイムの存在を認めても、「社会『調査』」の世界が、実証主義以外のパラダイムの存在を想定できず、自分たちが実証主義のパラダイムに依拠していることを自覚していないためではないかとさえ筆者には思われる。それはあたかも、卓球以外に球技を知らない卓球選手がテニスプレーヤーを卓球台の前に連れて来て、「あなた方のしていることはこの台からはみ出すから球技でもスポーツでもない」と決めつけるのと同じである。それに対してテニスプレーヤーが、「お互い少しならばみ出してもいいじゃないか」と言うとするれば、卓球にとってもテニスにとっても何も有益なことは無い。

このように、少なくとも社会調査で言うところの「質的調査」は、依然として無自覚ながら実証主義を基盤としており、そこから脱却するものではなさそうである。その点でそれは、今日的な「質的研究」とは異なるものだと思われている。このことは、岸(2015)が「だからといってどちらも事実には到達できないわけではない」と述べていることから明らかであるように思われる。社会調査が「事実(実在)」を追求するものであるなら、やはりその全体は実証主義パラダイムに依拠していると考えざるを得ない(なお同様に完全に質的に記述されていても今日的な意味での質的研究とは呼ばないものに、心理臨床、医療、社会福祉などの対人援助における介入とその結果を記述した事



例研究や症例研究がある。なぜなら質的研究は通常、自然主義的 (naturalistic) な状況で行われ、介入を伴わないものだからである。たとえばn=1の質的研究として紹介した上記の安藤 (2014) の著者は臨床心理士だが、この研究の研究参加者はクライアントではないし著者は心理職としての介入を一切していない。

3 質的研究の手続き

1 リサーチクエスションの設定

質的研究のリサーチクエスションは、量的研究では問えないような問いであるべきである。それらはたとえば、①具体的な状況や過程はどうであるのか？ (具体的な状況・過程の記述。結果志向でなく経過志向)、②外見的に観察・測定可能な事象より、その内側の意識や気持ちはどうであるのか？ (個人・集団の内的現実の解明)、③どういう仕組みや関わり合いがあるのか？ (潜在的構造の解明)、④潜在する問題の探索、発見、解明などである。

2 データ採取

質的研究のデータ採取は、人から直接に行う観察、面接 (個別インタビュー)、フォーカスグループなどが主であるが、文書、映像、人工物などから行うこともある。

3 データ分析

データ分析は、基本的には研究対象に対する研究者の経験や研究的知見を背景に、データを丹念に読み込んでいくことで行うが、その際には、コーディング、理論的コーディング (グラウンデッドセオリーの概念)、質的データ分析なども行われる。コーディングには、選定されたあるいは標準化されたコード群からコードを選んで付す「テンプレートコーディング」とデータを読みながら探索的に自由にコードを付す「生成的コーディング」とがある。前者は量的研究

でも用いられるもので、質的研究では非常に実証主義的な研究以外では用いず、主として後者を用い、後述のSCATもこれを用いる。

4 理論化とその必要性

質的研究は、観察対象や面接対象についての記述のみに終始してしまう傾向がある。しかし高木 (2016) は、質的研究の科学性に関して次のように述べている。「科学研究は、ある理論に基づき演繹的でなければならない、帰納的方法は理論構築の手段ではあるが、科学研究には特定の理論が必要である。このため、理論構築に関係しない単なる記述的研究は科学とはいえないし、反証できないような理論は、非科学として意味のない理論である」。つまり高木 (2016) は、質的研究は、反証可能性のある「理論」を示してこそ科学であるのだと述べている。

いっぽう、理論化の必要は、質的研究の社会的な機能や役割の文脈からも論じられる。たとえば平井 (2013) は、質的研究の意義を「社会の急速な変化により生活世界が多様化することで、新しい文脈や視野に対応するには、演繹的方法 (既存の理論モデルから設問・仮説を導き、実証的データと比較する) では対応しきれない。よって、実証的データから新たに理論を作る帰納的な研究の戦略が必要となる。この場合、知と行為は地域的 (ローカル) なものとみなされる」とまとめ、この「新たに理論を作る」ことこそが、今日の質的研究に課せられた課題であるとしている。

なお後述のSCATは最終的に理論を記述する手続きを有する質的データ分析手法である。

4 質的研究の研究倫理

質的研究は、個人や社会集団の仕事や生活に分け入って観察やインタビューを行うため、そこで採取されるデータは量的研究のそれよりもプライバシーや個人情報を格段に多く含むこと

になる。また、現場で観察を行う研究者の存在は研究対象となる営みに影響を与えるし、インタビュー自体が心理的な侵襲性を有することもある。そのため量的研究以上に研究倫理に対する厳しい姿勢が求められる。質的研究を行う者は、まずこのことを深く心にとめる必要がある。

いっぽう量的研究の研究倫理の考え方を機械的に適用すると問題を生じる場合もある。たとえば上記のようなn=1の研究では、その1人に「他にもないあなたのお話を聴かせて頂きたいのでぜひ研究参加者になって下さい」と切にお願いするわけだが、このような文脈で、今日では常識となっている「研究参加の同意の撤回の権利」について機械的に説明するとすれば、その人は「どうしても私に話を聴きたいと言っておきながら、同時に、その私にいつでも研究から降りて良いと言うのはおかしいではないか」という疑念を持つ可能性もある。このように、多様なパラダイムに基づく個々の質的研究では、個々の質的研究固有の研究倫理に関する体系的で包括的な考え方が必要である。

5 質的データ分析手法SCAT(Steps for Coding and Theorization)

質的研究では、観察記録や面接記録などの言語的なデータを分析する必要があるが、それには、量的研究における統計的手法のような一般的で定式的な手法は存在しない。そこで多くの分析では、そのデータにコードを付けていくのだが、そのコードがうまく案出できない場合もあるし、コードは案出してもそれが妥当であるかどうか自分で判断できない場合もある。また、妥当なコードをなんとか付けられても、そこから理論化に発展させることができない場合もある。質的研究に魅力を感じながらもそれに着手できないことがあるのは、多くはこのような、質的データの分析とそこからの理論化の難しさのためだと考えられる。

SCATはそのような、質的データの分析の困

難さの問題を克服するために開発された手法である。SCATでは、マトリクスの中にセグメント化したデータを記述し、そのそれぞれに、〈1〉データの中の注目すべき語句、〈2〉それを言いかえるためのテキスト外の語句、〈3〉それを説明するようなテキスト外の内容、〈4〉そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順にコードを考えて付していく4段階のコーディングと、〈4〉のテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である。この手法は、1つだけのケースのデータなどの比較的小さな質的データの分析にも有効である。また、明示的で定式的な手続きを有するため、初学者が着手しやすく、分析の適切性や妥当性を省察したり、共同研究者や指導教員と議論したりすることが可能になる。そしてなによりSCATは、質的データ分析の過程から、上述のような「秘儀性」や「ブラックボックス性」を排除する。くわえてSCATは、〈1〉から〈4〉へ向かうコーディングによる「脱文脈化」とストーリーラインの記述によるその「再文脈化」という機能も有しており、コンパクトながら深い析出力を有する質的データ分析手法である。SCATはこれらの特長により、本稿提出時点で国内外のあらゆる領域の研究者による612の研究で用いられており、それには博士論文37、修士論文49、国際学術誌掲載英文論文29が含まれている。筆者はSCATをまず大谷(2008a, 2011)で紹介するとともに、WEBページ(<http://www.educa.nagoya-u.ac.jp/~otani/scat/>)でその利用法に関する具体的な解説とSCATを用いた研究の紹介とを行ってきたが、大谷(2019)でさらに詳細で包括的な解説を行っている。

6 おわりに

本稿では紙幅の関係で質的研究のほんの一端を述べられたに過ぎない。本稿を通じて質



的研究に関心を持った読者には、大谷(2019)を手取ることを勧めたい。本稿にも本書から加筆修正して用いた部分があるが、本書はその読者として量的研究者も想定して執筆したためか、著者が予期しなかったような領域(たとえば情報工学や会計学など)の研究者にも

読まれており、質的研究に対する新たな需要を開拓しつつあるようにも感じている。本稿と本書を通して、質的研究に関するより包括的な理解を持って頂ければ、筆者にとってこれに勝る喜びはない。

文献

- 安藤りか, 2014, 「頻回転職の意味の再検討—13回の転職を経たある男性の語りの分析を通して」『質的心理学研究』13: 6-23.
- ウヴェ・フリック, 小田博志 監訳, 2002, 『質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』春秋社。
- 大谷尚, 2006, 「教育と情報テクノロジーに関する検討—ハイデッガーの『技術への問い』をてがかりとして」『教育学研究』73(2): 14-28.
- , 2008a, 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCATの提案—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』54(2): 27-44.
- , 2008b, 「質的研究とは何か—教育テクノロジー研究のいっそうの拡張をめざして」『教育システム情報学会誌』25(3): 340-354.
- , 2011, 「SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法」『感性工学』10(3): 155-160.
- , 2013, 「私には夢がある—量的研究と質的研究を包括した研究認識論の創造のために」『質的心理学フォーラム』5: 93-94.
- , 2016a, 「質的研究とは何か—実践者に求められるその本質的で包括的な理解のために」『学校健康相談研究』13(1): 2-13.
- , 2016b, 「質的研究とは何か—その意義と方法」『日本歯科医師会雑誌』68(12): 1125-1134.
- , 2017, 「質的研究はどのように進めれば良いのか—しばしばなされる質問にもとづいたいくつかの具体的なガイド」『学校健康相談研究』14(1): 4-12.
- , 2019, 『質的研究の考え方—研究方法論からSCATによる分析まで』名古屋大学出版会。
- ・伊藤勇編訳, 2006, 『質的研究ハンドブック3巻 質的研究資料の収集と解釈』N.K. デンジン・Y.S. リンカン編. 平山満義 監訳. 北大路書房。
- Otani, Takashi, 2020, “Functions of qualitative research and significance of the interpretivist paradigm in medical and medical education research”, *Fujita Medical Journal*, 6(4): 91-92
- 小田博志, 2002, 「解説」ウヴェ・フリック, 小田博志 監訳, 2002 『質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』春秋社, 349-360.
- 神原一之, 2016, 「教授単元開発を通してみたある数学経験教師の専門的知識に関する記述的研究—自己エスノグラフィーによる分析と教授単元開発過程 2元分析表の開発を通して」『数学教育学研究』22(2): 97-107.
- 岸政彦, 2015, 「量的調査のブラックボックス」『社会と調査』15: 60-73.
- 近藤百玲, 2016, 「主体的問題解決のための思考過程の解明の試み—自己エスノグラフィーを通じた探索的検討」名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻『教育論叢』59: 19-34.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学ライフヒストリーの聞き方』せりか書房。
- 高木廣文, 2016, 「質的研究における科学性とテキスト解釈の問題について」『国際医療福祉大学学会誌』21(2): 1-6.
- 林知己夫, 1976, 「心理学にとっての数量化とは何か」『科学基礎論研究』13(1): 9-14.
- 平井明代, 2013, 「質的研究—基礎: 定義・特徴・量的研究との比較他」筑波大学人分社会科学研究所現代語・現代文化専攻平井明代研究室 SLAA研究会 (Second Language Acquisition and Assessment Research Group) <http://www.u.tsukuba.ac.jp/~hirai.akiyo.ft/meeting13.files/SLAA2013829.pdf> (2021年1月25日閲覧)
- 山元淑乃, 2019, 「非ネイティブスピーカー志向の第二言語習得—日本人英語学習者Aの語りの分析を通して」『言語文化教育研究』17: 360-382.